
Non-...daily life

横山 龍也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Non - . . . daily life

【Nコード】

N9249Y

【作者名】

横山 龍也

【あらすじ】

ここは科学ではなく、魔法が発展した世界“セイルーン”
この世界では人間や動物の他にエルフや妖精などが住んでいる。

すべての生きる者には魔力が宿り、誰もが魔法を扱うことができる。

魔法には属性がある。

闇 光 氷 土 風 木 雷 水 火

の9属性がある。
だが、まだ確認はされていないが、全ての属性を扱える“無”属性もあると言われている。

そして、世界はこの“セイルーン”だけではない。

神や天使が住んでいる天界。

精霊がいる精霊界。

そして魔物や魔人が住む魔界がある。

そして人間界には昔魔王を倒したと言われている十の貴族、“十貴族”（ジュツキゾク）が存在する。

クライスト

ボルケーノ

ウンディーネ

ボルト

ルークス

アース

ルージュ

オプティカル

キルラント

マルタス

その十貴族を纏める王族“ローレンツ”

セイルーンはこの貴族たちによって均衡が保たれている。

一般的人間の魔力の平均値は1000程度であるが、神や天使、精霊や魔物、魔人はその100倍といわれている。

そのため、人間の中でも魔力が高い者はギルドとよばれる組織に属する。

そしてギルドの頂点といわれる“聖光の守護者”は、いつしか誰もが憧れる存在になった。

7年前の第二次世界大戦で活躍した8人の英雄が“聖光の守護者”に所属していたからだ。

そしてこれは“聖光の守護者”に憧れた者たちと力が全ての世界に泣いた少年の出会いの物語りである。

最強の魔術師（前書き）

王道物ですが、書いてみたくなったので書いてみました！笑

最強の魔術師

人が集まる城下町。

そこにある見上げるほどの大きな建物。

その前に人が一人立っていた。

その人物は漆黒のコートを身に纏っている。

建物はまるで城のようだ。

しかし、この世界ではお城は一つしかない。

それはここ、王都【セイルーン】にある『シンオウジョウ新王城』である。

だが、この建物は『新王城』ではない。

門番もいなく、建物の入り口の上の看板には“聖光の守護者”と大きく書かれている。

コートの人物は、扉を開けて中に入った。

建物内は人で混雑しており、屈強そうな人たちがたくさんいる。

コートの人物が人だかりを避け、建物の中央にあるカウンターのよ
うな場所まで歩いていく。

今までガヤガヤとうるさかった建物内も、その漆黒のコートを見た

者から声が聞こえなくなっていく。

カウンターに着く頃には、建物内はシーンと静まりかえっていた。

「……すみません」

コートの人物がカウンターにいた女性に声をかけた。

この建物の受付をしているのだろうか。

しかし、その女性も漆黒のコートを見た途端に固まってしまい、声も出せずにいた。

「あのっ」

固まっていた女性が反応しなかったので、コートの人物はもう一度女性に声をかけた。

「あ……はいっ」

今度は反応出来た。

それほど大きな声だったのだろう。
受付の女性は慌てながらも続ける。

「えっと、任務の報告ですね？」

で……では、ギルドカードの提示をお願いいたします。」

コートの人物は言われたとおり、懐から黒いカードを出して、女性に渡した。

「確認いたしました。お疲れ様です。」

「ありがとうございます」

そう言って、コートの人物はカウンター奥にある扉に入っていった。

バタンツ

と扉を閉めると、コートの人物は深く被っていたフードを取った。

肩まである黒い髪に黒い瞳。

男とも女とも言える容姿で、身長は165cm程だろうか、まだ幼さが残る感じであった。

「あんのジジイ・・・絶対許さねえ」

声は女性のような感じだが、口調からして男のようだ。

そしてその少年は、ぶつぶつと何か言いながら目的の扉へと向かって行った。

少年が向かった扉の上には“ギルドマスター”と書かれたプレートが掲げられていた。

「やっとついたか」

コンコン

そう言いながら、その扉を2回ノックした。

「入」どつがあああん」

返事が帰ってくる前に、少年は魔法で扉を破壊した。

いや、扉だけではない。

扉の向こうの部屋は、跡形もなく吹き飛んでいた。

ガラッ

焦げ跡が残る部屋．．．いや、もう部屋ではないが．．．その瓦礫の下から這い出るように誰が出てきた。

「ジジイが持ってきた今日の任務．．．資料と魔物の数が全然違うじゃねーか！」

部屋に入ってきた．．．もとい扉を破壊した少年は、今まさに死んでしまうほどの傷を負った老人に向かって怒鳴りつけるように言っ

た。

「全然つて、お前にとってはさほど変わらんじやろつが！」

「100と400のどこが変わらねえんだよ」

そう言うと、少年は何やらぶつぶつと唱え始めた。

『全てを破壊する漆黒の闇よ

その悪の力を我のために使え』

「ば．．．ばかもん！」

それは闇属性の上級魔法．．．」

言い終わる前に、少年が手を老人に向けた。

「ギオ・ダークレイズ」

「ギイヤヤヤヤヤ．．．」

男の悲鳴が建物内に響き渡った。

ここには人間に危害を加える者を討伐するために軍隊やギルドと言
うものもある。

軍隊はどんなものか想像できるだろうが、ギルドとは何か？

ギルドは、民間人や政府などからいろいろな依頼を斡旋する機関。
“聖光の守護者”や“虹色の鈴”などは世界的にも有名である。

依頼とギルドの登録者は、アルファベットで分けられる。

依頼の難易度が高くなると危険が伴うため、それに見合う者が受けるようにということである。

アルファベットは、上からSSS、SS、S、AAA、AA、A、
B、C、D、E、F、Gとなっている。

特に登録者のアルファベットは、ギルドランクと言われている。
魔法にもランクがあり、上から、初級魔法、中級魔法、上級魔法、
最上級魔法、神級魔法がある。

いつの間にか部屋も元に戻り、老人と少年は向かい合っていた。

「で？」

俺に何か用なのか？

ま、任務なんだろうけどさ」

少年が言う。

「まあ、もう少し待ってくれ、もう一人呼んでおる。」

「もう一人？」

少年がそう言うと、部屋の扉が開いた。

「失礼します。」

入ってきたのは、少年と同じ歳くらいで黄色い髪を短くしている男だった。

「レオ！」

少年が入ってきた人物を見て言った。

レオと言う名前なのだろう。

レオ「アルじゃねえか！」

少年の名前はアルというらしい。

「二人が来たところで、二人に任務を言い渡す。

『漆黒の魔術師』、『雷帝』、お前たちの任務は・・・

フェアリー学園に行ってもらおうことだ。」

「「は!?!」」

二人は理解できずにポカーンとしていた。

ちなみに、『漆黒の魔術師』はアルのこと、『雷帝』はレオのことである。

ギルドランクがS以上の者は、二つ名がつけられる。

二つ名持ちは、世界でも数人しかいなく、世界中の人々からは英雄として扱われる。

ポカーンとしている二人を無視して、ギルドマスターが続ける。

「だから、学園に通ってもらおう！」

レオ「なんで今さら学園なんて・・・」

レオは嫌そうな顔をしながら言った。

それもそのはずである。

二つ名持ちということは、ギルドランクは二人共S以上なのだ。学園の教師のほとんどはAAランクと言われている。

つまり二人とも教師に教わることなんてないのだ。むしろ教えられるだろう。

しかもレオは『雷帝』である。

二つ名に『帝』がつくのはSSランクの者だけ。

SSランクは世界でも20人いるかどうかである。

ちなみにSSSランクは世界に一人しかいない。

現SSSランクは『漆黒の魔術師』である。

つまりアルこと、アルフェイトだ。

この二人に学園に行くことの意味があるとは思えないのだが、

アル「・・・護衛か？」

この一言にレオは思いついたように

レオ「フェアリー学園といえば、じゅうきざい十貴族が通っている。

そして・・・」

アル「この国の姫もな・・・」

十貴族とは、この世界をにている上流貴族のことで地位でいえば王族の次に偉いと言われている。

たとえ二つ名持ちでも貴族の地位には敵わない。

と言っても、世界最強と言われている『漆黒の魔術師』は王族と同じ権限があるし、『帝』の名を持つレオは上流貴族と同じ地位があるのだが・・・

まあ、この二人は例外である。

しかし、

アル「そういうことなら仕方ないな」

レオ「総帝様がそう言うなら、俺もお供しますよ」

総帝とは、アルのもう一つの二つ名である。

『帝』とは世界に8人いて、その『帝』たちのことを八帝という。総帝とは、ほかの7名の帝をまとめる者につけられる名でもある。

ほかの七帝は、雷帝、炎帝、氷帝、風帝、土帝、闇帝、光帝、となっている。

八帝は全員“聖光の守護者”に所属している。

そんなこんなで？二人はフェアリー学園に通うことになった。

最強の魔術師（後書き）

これから頑張ります！笑

初日（前書き）

とりあえず2章続けて書きました。

初日

小鳥のさえずりが聞こえるような静かな森の中にアルの家があった。

アル「ふぁ．．．寝みい」

アルは欠伸びながらも顔を洗うため洗面所に向かった。

「〜」

すると突然携帯が鳴った。

「もしもし．．．」

「アルか？」

わしじゃ、クロノスじゃ」

クロノスとは、“聖光の守護者”総司令・ギルドマスターだ。

クロノス「昨日言い忘れたんじゃが．．．」

アル「なんだよ？」

クロノス「今日から学園に編入してくれ！
それじゃ〜」

ツーン…ツーン…

アル「あいつ…切りやがった。」

アルは慌ててクロノスにかけ直した。

クロノス「な…なんじゃ？」

クロノスは何かに怯えているようだ。

アル「いきなり過ぎだろ。」

正体とかどうすんだよ！」

確かにアルの正体が普通の生徒にバレるのはまずい。

クロノス「別にどっちでもよい。」

アル「はあ!?!」

クロノス「お前の好きにしろ。」

アル「はあ．．．わかったよ。
で、何時に行けばいいんだ？」

現在 8時50分。

クロノス「9時じゃ！
じゃ〜そういうことで。」

ツー．．．ツー．．．

「ってヴォオオオケがああ?!?!」

急いで支度をし、『転移』と言って学園に向かった。

『転移』とは上級魔法の一つで、自分が行ったことのある場所に瞬間移動のように一瞬でたどり着ける魔法。

アルはフェアリー学園には行ったことはなかったが、フェアリー学

園がある街には何度か行ったことがあるため、学園の近くに転移した。

ここフェアリー魔法学園は、生徒数2300人、教師は200人、総勢2500人がいる。

敷地も半日かけてやっと全部回れるほどの大きさだ。

とにかく全てにおいて馬鹿でかい。

まるでお城のような感じで、綺麗だ。

そこへ一人の少年が現れた。

アル「一応間に合ったか・・・」

「遅いぞ、アル。」

そう言ってアルに近いてきたのは、レオだった。

アル「さっきジジイに聞いたんだよ。」

レオ「俺は昨日聞いたけどなあ・・・」

ブチッ

アル「さあ、レオ・・・確か最初に学園長の所に行くんだっただね」

アルがこの世のものとは思えないほどの素晴らしい笑顔で言った。

レオ「あ・・・ああ」

アル「じゃ〜早く行こう」

レオ（確かここの学園長って、マスターの弟だったな・・・）

御愁傷様と思いながら、レオはアルの後を追いかけた。

そんなこんなで学園長室の前にたどり着いた二人は、コンコンと扉をノックした。

すると中から威厳がある声で、

「どう「ドツガアアアアン!!」」

あれ？

どこかで見たような光景だな・・・と思いながらも、アルは気にしないことにした。

もちろん、みなさんはわかっていると思うが、部屋はまたもや跡形もなく吹き飛んでいた。

「初めまして。

『漆黒の魔術師』様、『雷帝』様。

私が此所の学園長をしているグラン・シュピッツです。」

あれだけ高密度の魔法を結界で防いだのだろうか。

平然と部屋の中央に立っている。

グラン「兄から聞いていた通り、無茶をなさる。」

これには魔法を打ったアルも、それを見ていたレオも驚いていた。

レオ「手加減していたとはいえ、アルの魔法を防いだ・・・」

アル「これではジジイも形無しだな」

それぞれ適当な挨拶を済ませ、グランの切れ長な目が二人を見据える。

グラン「君たちのことは兄から聞いている。

その歳で大したものだ。」

レオ「いや、まあどうも」

グラン「さて、本題に入ろう」

急に引き締められた空気にレオは姿勢を正す。

アルはそのままだったが・・・

「君たちの任務は、私には詳しく話されていない。

私が君たちにしてやれることは学園内でのサポートだけ。

ただし、君たちの正体を知っているのは私だけだ。」

サポートにも限界があると言いたいのだろう。

「とりあえず、君たちは特待生という形で編入させる。

学園内の施設は好きに使えるだろう。

寮も用意させてもらった。

ちなみに正体は？」

レオ「できるだけ隠したいですね。」

グラン「そうか。

ではこれを」

そう言ってグランはカードのような物を二人に差し出した。

アル「ギルド登録証か」

グラン「はい。」

この学園では、実習でギルドの任務を受けることもあります。

その時にはギルドカードの提示をしなければなりませんので、こちらで偽造カードを作らせていただきました。

ちなみにランクは、Aランクにしておりますがよろしかったですか？」

アル「ああ、それでいい」

レオ「でも、学生でAランクは高すぎるんじゃない？」

グラン「この学園の生徒会長は、Aランクですよ」

レオ「へえ、学生の割には見込みのあるやつもいるんだな」

グラン「とりあえず、これでよろしかったかな？」

アル「ああ」

その時、またもや直されていた扉をノックする音が聞こえた。

グランが「どうぞ」というと、見た感じ若そうな女性が入ってきた。

「失礼します」

その女性が部屋の中央に来たところで、グランが紹介する。

グラン「彼女が君たちの担任になる、セレナ・シュピッツだ。」

レオ「シュピッツ?」

そう、シュピッツとはギルドマスターと学園長と同じ名である。

グラン「私の娘だ。」

セレナ「私があなたたちの担任になる、セレナ・シユピッツよ。よろしくね。」

これにはさすがのアルも驚いた。

似てない。

非情に似ていない。

学園長は、白髪をオールバックにし、ゴツゴツした感じだ。

お世辞でもかっこいいとはいえない。

しかし、娘だというこの女性は銀髪を美しく見せるようなストレート、誰が見ても美人だと言っほどの容姿だ。

二人が固まっていると、何やら雑音が聞こえてくる。

グラン「私も・・・昔はかっこよかった・・・」

二人、いや、三人はそれを無視して挨拶を交わしあった。

それにしてもこのセレナは、若いながらも相当な実力を持っているのだろう。

受け持っているクラスは、Sクラスと言っていた。

学園とはいえ、Sクラスはその学園の実力者が集まる。

特待生のアルやレオもSクラスに入る。

おそらく、十貴族や王族もSクラスにいるはずだ。

そこの担任をしているんだ。

二つ名持ちでも不思議ではないが・・・

そんなことを考えていたアルは、セレナが話しかけているのを無視するかたちになっていた。

セレナ（アルくんは気難しそうね・・・）

勝手にそんなことを思われている。

セレナはある教室の前で立ち止まる。

セレナ「では、私が呼んだら入ってきてください」

セレナはアルたちの返事を待たずに教室の中に入っていった。

レオ「学園なんて初めてだから緊張するなあ」

アル「全然そんな風には見えないけどな」

レオ「ははっ！！言ってみただけ」

アルたちがそんなことを話している時、教室では・・・

セレナ「みなさん、静かにしてください。
今日は転校生がいるので紹介します」

すると、セレナのその言葉に沈黙していた生徒たちの雰囲気は一気に上がった。

「先生！男ですか？女ですか？」

セレナ「お前はなにお決まりのセリフを言ってるんだ！
二人とも男だよ」

「二人いるんですか？」

セレナ「ああ」

「イケメンですか??」

セレナ「さあね。

自分たちの目で確認しろ。

入っていいぞー」

教室の中からセレナの声が聞こえた。

レオ「入っていいってさ」

アル「だな。行くか」

二人が教室に入ると、物凄い音量の歓声が主に女子から聞こえる。

セレナ「えー静かに!!!」

では二人とも自己紹介してください」

その一言で教室がシーンとなった。

レオ「じゃーまずは俺から」

微笑みつつレオが前に出た。

レオ「俺はレオ・克蘭ツ。

属性は雷と土です。

よろしく」

レオの自己紹介にクラス全体が湧いた。

二属性持ちは学生ではなかなかいないからだ。

アル「んじゃ、次は俺だな。

俺はアルフェイト。アルって呼んでくれ。

属性は闇と火と氷だ。

まあよろしくな」

最後にアルが笑顔を見せたのでまた女子から歓声上がる。

もちろん男子も三属性という稀な存在に声を上げた。

二人の自己紹介が終わった時にちょうどチャイムが鳴った。

セレナ「次は魔武器精製をやるから、闘技場に集合してくれ」

セレナのその言葉でアルたちは移動することにした。

その時、アルの後ろ姿を凝視する少女がいた。

が、アルはその視線に気づいてはいたが、気づいてないふりをして闘技場に向かった。

初日（後書き）

どこかで見たとような内容になってしまった。。。

同じ設定でも僕にしか書けない話にしてやる！笑

魔武器精製（前書き）

本日3章目の更新！

今回は魔武器精製の話です。

どんな魔武器にしようかなあ。。。。

魔武器精製

場所は変わって現在は闘技場。

セレナ「よし！みんないるな。

さつきも言ったが、今からみんなには魔武器を精製してもらおう」

セレナがそう言うのと生徒たちから歓声が上がる。

セレナ「魔武器はこの魔鉱石に魔力を流せば作れる。

ちなみに形を故意に決めることも可能だが、かなり魔力をつかうから普通に作ったほうが楽だぞ！！

魔武器の色は指定しないかぎり自分の属性の色になる。

魔武器は作ったら名前を決めないと能力がわからないからな。

説明は以上だ。

適当に5〜6人のグループになって魔鉱石を取りにこい。」

セレナがそこまで言うと、みんなは仲の良い人同士でグループをつくりだした。

さすがにアルとレオは初対面で誘うのは抵抗があるため、人数の少ないグループが出来るのを待っていた。

「アル様！！」

すると誰かがアルの名前を呼んだ。

アル「ティアラか・・・」

名前はティアラというらしい。

ティアラ「一緒にやりませんか？」

アル「俺たちは別に構わないが・・・」

アルはそう言うと、ティアラの後ろにいる人たちに視線を向けた。

ティアラ「みなさん、大丈夫でしょうか？」

「・・・・・・・・私は・・・別にいい・・・・・・・・よ・・・」

「もちろん、俺は「私も全然いいよ!!」」

一人可哀想な奴がいたが、3人の許可を得たのでアルとレオはそのグループに入った。

レオ「さてと、とりあえずみんなの名前教えてくれるかな？」

そう言ってレオは3人に話しかけた。

「・・・私・・・ミラ・・・アル、レオ・・・よろ・・・」

ミラは背が低めで、顔も幼さが残る感じだが、顔は可愛く髪は紫色のショートカットだ。

「私はリオ!!よろしく」

元気に挨拶してきたのは、リオというらしい。

リオは長い青色の髪をポニーテールにしており、可愛いというよりは美人な顔つきだった。

ティアラ「私のことは知っているとは思いますが、ティアラです。よろしく願いいたします。」

ティアラは気品溢れる口調と腰まである綺麗な金髪が特長の女の子だ。

リオ「これで全員かな」

「ちょっと待てよーーーーー!!!」

リオがそう言うと、泣きそうな顔で割り込んできた男がいた。

リオ「あら、いたの？」

完全にいじられ役のようだが、アルは少しこの男が可哀想になってきた。

「俺の名前はグリード!!」

二人とも二属性以上なん「グリード、早く魔鉱石取ってきて!!」

そう言ったのはリオだ。

ミラ「.....早く.....」

二人にそう言われ、仕方なくグリードは全員分の魔鉱石をとぼとぼと取りに行った。

グリードは緑色の髪を短くしていて、好青年のような感じなのだが、どうやらここではいじられキャラのようであるもグリードには厳しくしようと心に誓った。

グリードが魔鉱石を取りに行っている間、アルは魔武器について話していた。

アル「3人は武器指定するのか？」

とアルが聞いてみると。

ティアラ「私はしませんわ」

リオ「私も!!」

ミラ「．．．私．．．も．．．．アルは．．．？」

アル「俺は指定する」

リオ「レオ．．．君は？」

レオ「レオでいいよ。」

俺もしようかと思ってる」

ティアラ「どんなのを造られるんですか？」

アル「秘密だ」

レオ「見てからの楽しみみてことで」

そんな話をしていると、魔鉱石を持ったグリードが帰ってきた。アルたち6人は全員同時に魔武器を精製することにした。

そして全員が魔鉱石に魔力を流した。

ティアラは純白の弓矢。

リオは青色の双剣。

ミラは黒い双銃。

グリードは緑色の大剣。

レオは黄色い槍。

アルは……何も持っていなかった。

リオ「え？

アルの武器は？」

ミラ「……失敗……？」

みんながまじまじとアルの方を見ていた。

アル「今見せる」

アルがそういうと、目があけられないほどの強い光がアルを包み込んだ。

しかしレオだけは、しっかりとアルの姿を見ていた。

しばらくしてから光が収まりティアラたちが目を開けると、2mはある漆黒の翼を生やしたアルが立っていた。

その姿はまるで悪魔のようであったが、漆黒の羽であるにもかかわらず、キラキラと光っていて非常に美しく見える。

その光景にはクラス中がアルに見とれていたのである。

アル「よし！！イメージ通りだな。

名前はシンプルに“黒翼”^{コクヨク}だな。

能力は……普通の魔力を流すと硬質化で、属性付加すると属性によって能力が変わるか、なかなか良いものをつくったな」

アルが満足していると、リオが質問してきた。

リオ「アル！なんでそんな凄い魔武器つくれるの！？能力だつて凄いし」

アル「ああ、俺は魔力が多いからな。だからじゃないのか？」

てか、お前たちも早く名前つけたほうがいいんじゃないか？」

アルのその言葉で、名前をつけるのを忘れてたのをみんな思い出した。

アルはみんなの持っている魔武器を見て

アル「ティアラは光で、リオは水、ミラは闇、グリードは風属性か。名前は決まったか？」

リオ「うん！

私のは“水刃”^{スイジン}で能力は、魔力を流すことで高密度の水を飛ばせる」

ミラ「．．．私は．．．“霧”^{ミツレ}と“霞”^{カスミ}．．．．．能力は．．．
．霧が．．．魔力を込めると剣になって、霞が．．．自動追尾．．．
するの」

ティアラ「私のは“白景”^{ヒヤッケイ}です。

能力は、放った矢を操作できることと込めた魔力によって同時に射てる矢の数が変わるらしいです」

グリード「俺の魔武器は“空牙^{クウガ}”だ。

能力は風を纏わせることで大きさや数が変わる鎌鼬を放てる」

アル「みんないい能力だな。

特にミラのやつは凄いな!！」

そついうとミラがトコトコ近づいてきて

ミラ「・・・褒めて・・・」

とつのでアルはミラの頭を撫でてあげた。

ミラ「・・・うにゃ・・・」

と嬉しそつに目を細めた。

その光景を見ていたティアラとリオが

((いいなあ))

と思っで見っていた。

グリード「そついえばレオの魔武器は？」

魔武器精製（後書き）

頑張りました。。。

1日でこんなに書くなんて・・・笑

あ、Peace-of-Destinyという小説も書いてますのでそちらも良かったら見てみてください

そっちは今日更新できないなあ・・・泣

侮辱と友達（前書き）

この話のイラストも描きたいなあ。
でもどうやって載せれば．．．笑

あ、感想いただけると嬉しいですよね。。。
作者は単純なのでアホみたいに喜びます。

え？

いや．．．強制しているわけでは．．．笑
でも待ってます　笑

侮辱と友達

アル「（ボルト家か．．．感ずかれたか？）おまえ誰だ？」

アルは少し焦っていたが、冷静に対応した。

「な！君は僕のことを知らないのか！？」

十貴族のボルト家のロイだ！！」

アル「はいはい、わかったわかった。

それで、何の用だ？」

鬱陶しいのと焦っているの、アルはかなり雑な対応になりだした。

ロイ「き、君は！

．．．まあいい、率直に言おう。

そんな“汚れた”やつなんかと一緒にいないで僕の仲間にならないかい？」

ロイはミラに視線を送りながらニヤニヤした表情で言った。

その言葉にミラは俯き震えアルの着ているローブを強く握り、ティアラとリオはロイを睨んでいた。

しかし、アルはその二人よりも明らかに怒っていた。

アル「てめえ、今なんだった？」

普段のアルからは想像できないほどの低い声で言った。

ロイ「何を怒っているんだい？」

僕は事実を言っただけさ、その女は貴族でもなんでもない。汚ないやり方でルージュ家に取り入った薄汚い女なんだよ」

そこまで言ったロイに対して、アルはあり得ないほどの殺気を放った。

レオ(こういう時、鈍い奴は本当に羨ましいな・・・)

あの殺気を感じることができないなんて・・・)

レオの額からは汗が滲み出てきていた。

そしてもう一人・・・

セレナ(な、なんだあの異常な殺気は・・・)

あいつ・・・本当に学生か?)

セレナは今にも倒れそうだった。

しかし、生徒の殺気ぐらいで教師が倒れるわけにはいかないと思っ

たのか、ギリギリのところまで踏ん張っていた。

殺気は無意味だと思ったのか、アルは殺気を消した。

アル「ミラ、俺はお前を友達だと思ってる。
だからそんな不安そうな顔するな」

先程まで殺気を放っていたとは思えないほど優しく、穏やかな表情でミラを見ていた。

アル「怖かったろ？」

あんな奴でも地位は高いから下手に刺激したら大変だからな……

でも、俺が今日から自由にしてやる」

そういうとミラは、アルの背中に手を回して抱きしめ、アルの胸に顔を押し付けて静かに泣いた。

アルはそんなミラの頭を撫でながらロイを睨み付ける。

アル「弱いくせに調子に乗るなよバカ貴族！

俺が今日、お前の弱さを教えてやるから放課後に俺と闘え！！」

ロイ「ふん！」

何故僕がわざわざ君なんかと闘わなきゃいけないんだい？」

アル「へえ、逃げるのか？」

十貴族の息子が俺みたいな庶民に怯えてるのか？

最近のお坊ちゃんも臆病なんだな」

そうアルが挑発すると

ロイ「僕が臆病だ?!?!？」

いいだろう、闘ってあげるよ!!！」

今の発言を後悔させてやる!!！」

そう怒鳴ると、ロイはグループの所に帰っていった。

ロイがいなくなるとリオが話しかけてきた。

リオ「ちよつとアル!!！」

大丈夫なの？」

アル「何が？」

リオ「ロイにあんなこと言って。

ロイはああ見えて学年2位の實力なんだよ？」

アル「じゃあ逆に聞くが、お前たちはミラがあのままでもいいと思ってるのか？」

リオ・ティアラ「そんなことない（です）！！」

アルがそう聞くと二人は涙目で答えた。

リオ「私たちだってミラを助けてあげたいわよ！

あいつを倒してミラに酷いことをするのをやめさせたい！！

でも．．．でも私じゃあいつに勝てなかったのよ．．．」

リオとティアラは涙を流し、悔しそうに言った。

そんな二人を見たアルは

アル「すまない．．．聞くべきじゃなかったな。

心配するな、明日からあいつは俺たちに何もなくなる」

ティアラ「アル様にまかせておけば大丈夫ですね。

さあ、先生の所に戻りましょう」

そういふと6人はセレナの所に戻っていった。

侮辱と友達（後書き）

眠い．．．。

でも更新できました！

おもしろいかわかりませんが、この作品を見てくださってるみなさん．．．ありがとうございます！！

そしてこれからもよろしくです

恐怖は憤怒から（前書き）

たくさんの方が見てくれて・・・お気に入りにも登録していただいで・・・

作者はもう泣きそうです。笑

今回はアルフェイトの”強さ”が明らかになる・・・と思います！

恐怖は憤怒から

そして放課後。

闘技場に足を踏み入れた6人は、何故か多くの生徒が見に来ているため戸惑いながらも中央にいるロイに近づいていった。

ロイ「遅かったじゃないか。

逃げたのかと思ったよ」

アル「なぜ自分より弱い奴から逃げなきゃならないんだ？」

ロイの挑発に挑発で返すアル。

ロイ「き、君はどこまでも失礼な奴だね。

もういい、すぐに始めようじゃないか！！」

アル「いいだろう。
ティアラたちは観客席に行つてな」

アルはティアラ達を2階にある観客席に行くように言つと魔武器を出した。

ロイも魔武器の黄色い斧を出して構えた。

ロイ「こちらからいくぞ！
貫け“電槍”！！」

ロイが放つた雷の槍を翼でいとも簡単に弾いた。

ロイ「なっ！？
これならどうだ！

「大気に眠る雷よ、我が敵を呑み込め」
“流電の波”！！」

上級魔法の雷がアルを呑み込もうと迫るが、アルはそのままかわす素振りも見せずになだだ立っていた。

アル「……くだらねえ」

ドオオオオン！！

ロイの“流電の波”がアルに直撃した。

アルがいた場所は土煙が上がっている。

ロイ「アハハハ！！」

どうだ！僕に逆らうからそうなるんだ！！」

ロイは勝ちを確信し、高笑いを止めない。

ミラたちもそんなロイを見て、アルのことが心配になってくる。

ミラ「……ア……ル……？」

ミラに至ってはすでに涙目になっている。

しかしレオは土煙が上がっている所をジーツと見ている。

レオ「まずいな・・・」

その言葉を聞き、レオとグリードは慌てだす。

レオ「上級魔法が当たったのよ？
まずいに決まってるでしょ！！」

レオはレオにつかみかかるように言った。

レオ「アルじゃないさ・・・」

レオがそう言った時、ようやく土煙が晴れてきてアルの姿が見えてきた。

そこにはまるで何もなかったように無傷で立っているアルフェイトの姿があった。

ロイ「っ!!」

アル「こんなケンカで上級魔法を使っつてことがどついついことかわかってるのか？」

ロイ「な、何を言ってるんだい？」

アルは抑えてはいるが、誰が見ても怒ってる口調で話している。

ミラ「・・・アル・・・怒って・・・る・・・?」

アル「もし俺が今のを防げなかったら、死んでいたかもしれないんだぞ」

ロイ「ハッ!

それがどうした!？」

僕に逆らう奴なんてみんな死ねばいいの・・・」

途中からロイの言葉が閉ざされた。

観客席で見ていた者も驚いた表情をしている。

急にロイの頭が“吹っ飛ばされた”からだ。

と言っても、文字通り吹っ飛ばされたわけではない。
何かをぶつけられたようにロイの頭だけ吹っ飛んだのだ。

アル「死んでもいい．．．だと？」

アルのその言葉で、ロイの右腕が弾かれる。

その瞬間、闘技場にいた誰もが理解した。

“これは”アルフェイトがやっているのだと．．．．．。

リオ「ちょっとレオ！！
アルは一体何してるの？」

レオ「ただ殴ってるだけだよ」

グリード「殴ってるって．．．アルはあそこから一步も動いてないんだぞ!？」

レオ「お前らには見えないだけさ．．．

ロイは．．．引いてはいけけない引き金を引いてしまった。
もう誰にも止められねえ」

アル「次は．．．左腕だな」

ドンッ

ロイはもう意識を失っている。
それはまるで人形のように、ただただアルに遊ばれているように見えた。

アル「．．．右足」

バキィッ

生徒「ヒッ!!」

何かが・・・いや、完全にロイの骨が折れる音。

見ていた生徒も、リオやグリードもアルに恐怖を抱いた。

まるで惨劇だ。

いや、もつまるではなくなっている。

アル「・・・左足」

ドンッ

ロイ「ガッ・・・」

左足を弾かれ、ロイは闘技場の端まで吹っ飛ばされた。

そして・・・

アル「人が死んでもいい・・・そう言っなら自分が殺されても文句は言えないよなあ？」

ゾクッ

リオ「ア・・・アルやめてー！ー！ー！」

グリード「もういいだろー！ー！ー！」

リオはもう泣いてしまっている。

ティアラ「・・・。

どう思いますか？」

闘技場中がアルに恐怖を抱いている中、ティアラとリオはそんなア

ルを冷静に見ていた。

レオ「今のアルを止められる奴なんて、この世にはいない・・・

ロイはそれほどの地雷を踏んだのさ」

ティアアラ「しかし、これではアル様が・・・」

人を・・・ロイを殺してしまう。

そう言おうとしたティアアラだが、そこで言葉を止める。

今のアルは、たとえ“聖光の守護者”を使っても止められない。

ティアアラはそのことをわかっていた。

アルはそれだけの力を持っているのだ。

世界最強の力はそれほどのものなのだと・・・

アル「これで終わりだ」

恐怖は憤怒から（後書き）

次回はどうなるんでしょう？

アルはロイを殺してしまうのでしょうか……。

転入初日で無茶しすぎだろー！笑

ギルド”ウルフスツジ”（前書き）

ギルドにもいろいろあります。

今回はそのうちの一つが出てきます。

ギルド”ウルフスレッツ”

ガッ

誰もが、ティアアラでさえその光景を見まいと目をつぶった。

レオ「!!!?」

闘技場が静まり返る中、最初に聞こえてきたのは聞き取れないほどの声。

「ミリ」……もう……いいよ……アルウ……」

その声でティアラは目を開けた。

眩しい光から見えたその光景は・・・

ミラがアルの身体に抱き付いている光景だった。

ミラ「・・・こ、れ以上・・・したら・・・アルが悪者に
なる・・・よ？」

だから・・・も、う・・・。

・・・私・・・は・・・大・・・丈夫・・・だから。

・・・ありがとう・・・アル・・・」

泣きながらアルを必死で止めているミラ。

そんなミラの姿に、アルはいつもの優しい笑顔でミラの頭を撫でた。

アル「ありがとう、ミラ」

レオはそんなアルを見て驚いた。

レオ「信じ・・・られねえな」

ティアラ「ええ」

レオ（アルがあんなことで止まるなんて・・・）

いや、あの子だからかな？

レオも優しい笑顔でフフツと言って笑った。

レオ（ティアラも大変だな）

アル「ホーリーレイト」

アルがそう言った瞬間、ロイの身体を優しい光が包みこんだ。

アルが唱えたのは光の最上級魔法だが、誰も見たことのない魔法だったため、アルが最上級を使えることをつっこむ人はいなかった。

光が止むと、ロイの身体の怪我が全て治っていた。

アル「これでいいだろう」

リオ「ちょっとアル!!」

いつの間にか観客席から下りてきたリオにアルは怒鳴られた。

リオ「あんたちよっとやり過ぎよー!」

アル「あ、ああ、悪かったよ」

リオ「悪かったよじゃないわよ!!」

あんたがロイを殺すんじゃないかと思ってヒヤヒヤしたじゃない!」

グリード「そうだぜ!!」

それにど「アル様ー!!」

グリードが何か言おうとしたが、ティアラによって遮られてしまった。

ティアラ「アル様、これからどうするんですか?」

レオ「明日から大変だぜ?」

ここまでのことをしたのだ、観客席にいる人数も多い。理由はどうであれ、アルはここにいる人たちに恐怖を植え付けたのだ。

ミラ「・・・でも・・・アルは私のために・・・!!」

アル「大丈夫だよ、ミラ。

ミラは俺のこと恐いか?」

激しく首を横に振るミラ。

リオ「わ、私だって恐くないわよ!!」

グリード「あれえ？

さっきまで泣いてなかったっけ？」

ドガッ

リオの真空飛び膝蹴りがグリードの顎を捉えた。

リオ「そりゃああの時のアルは恐かったけど、今は全然よ!!
と、友達なんだから」

リオは顔を真っ赤にして言った。

アル「ありがとな」

リオ「べ、別に普通よ!!」

そして5人はそのまま闘技場をあとにした。

グリードを置いて・・・。

グリード「ちょ、待ってよー！

俺も友達だろー！ー！ー！？」

それからティアラたち4人はそれぞれ寮に帰っていったが、アルとレオは今、大きな建物・・・ギルドの前に立っている。

ちなみにここは“聖光の守護者”ではなく、街の小さなギルド“ウルベツジ”だ。

二人はあの後、ティアラたちと別れてここに来た。

レオ「私服でよかったの？」

“あの格好”の方が高ランクの依頼受けられるし、憂さ晴らしには
．
．
．

アル「いい．．．」。
あの格好の方が目立ちすぎて面倒だ。
それに、憂さ晴らしじゃない」

レオ「あれ？違うの？
まあ、いいけど．．．」

で？Aランクの依頼を幾つ？」

アル「．．．．．5．．．．．」

レオ「5!？」

今回は随分多いね？（やっぱり憂さ晴らしなんじゃ．．．）

レオはそう思ったが口には出さない。

アル「問題はないだろ？」

レオ「まあ、アルだったら朝飯前だろうね」

レオの言葉に、アルは無言で頷く。

レオ「じゃ、適当に難しいの選んでくるから待ってて!」

そう言ってレオはギルドの中に入って行った。

レオ「すみません。

Aランクの依頼を受けたいんですけど・・・」

受付係「はい、それではギルドカードを見せて頂けますか？」

レオは受付の人にギルドカードを渡す。

もちろんこのカードは学園長から貰ったダミーカードである。

受付係「レオ・クライツ様、Aランクですね。

どのような依頼をお探しで？」

レオ「えーっと、Aランクの中でもレベルが高くて、短時間で出来る物を・・・5つ」

受付係「はい？」

明らかに困惑した様子で、受付係は聞き返した。

レオ「だから、Aランクの・・・」

受付係「いえ、内容ではなく・・・
依頼数を幾つとおっしゃいました？」

レオの言葉を遮り尋ねる。

レオ「依頼数？5つ」

受付係「ほっ、本気ですか!？」

受付係が驚くのも無理はないだろう。

Aランクの依頼は危険度が高く、年に数人の死者が出るほどだ。

それをまだ若い男・・・いや、少年が5つもやるうとしているのだから。

しかも周りに仲間らしき人物も見当たらない。

まあ、アルは外にいたのだが。

レオ「本気だけど？」

受付係「・・・!!」

さらっと言うレオに受付係は言葉が出なかった。

???'「おいおい・・・あんまり受付係を困らせるなよ、レオ」

受付係の後ろから30代半ばである男が話し掛けてきた。

受付係「ギルドマスター!？」

どうやらこのギルド“ウルフベッジ”をまとめるギルドマスターらしい。

マスター「お前がこんな無茶な依頼を探すってことは……あいつか？」

レオ「まあね」

受付係「?????…あの…」

受付係は話についていけない。

マスター「ああ!悪い悪い。

こいつならどんな依頼でも大丈夫だから、希望に合ったやつを適当に選んでやってくれ!!」

受付係「……マスターがそうおっしゃるなら……」

受付係は渋々という様に、依頼が書かれた紙を5枚差し出す。

受付係「こちらでよろしいでしょうか？」

レオ「ん〜・・・うん！

この5つにするよ」

受付係「では、こちらの書類にサインをお願いします」

レオは言われた通りにサインをする。

受付係「それではお気をつけて・・・」

マスター「怪我すんなよ〜!!」

レオはマスターと受付係の言葉に小さく頷くと、ギルドの外で待つアルのもとへと歩いて行った。

ギルド”ウルフベッジ”（後書き）

今回はアルの憂さを晴らし・・・ではなく、お仕事の話になりますね。
笑

2章続けて更新できました！
でもやっぱり時間がかかってしまう。

しかし、今日も朝と合わせて3章更新！
書くのが早くなっていると思いたい・・・。笑

それではまたあゝ！！

予感（前書き）

どもども、今回のサブタイはとうしようか迷ったんですが・・・

やっと決まった。。。

あ、どうでもいいですよね？笑

それでは本編へどうぞー！

予感

レオ「お待たせ」

ギルドから出てきたレオ待ち構えて居たのは、いつの間にか動きやすい格好をしたアルだった。

アル「で？1つ目の依頼は？」

レオ「まずはー．．．マクリアの森でウォーターウルフマンの討伐。その後にはフレイドラゴンの討伐ね」

アル「ちょっと待て！！」

フレイドラゴンはAランクだが、ウォーターウルフマンはBランクじゃなかったか？」

アルは眉間に皺を寄せている。

レオ「えっと．．．」

ウォーターウルフマンは確かにBランクなんだけど、数がハンパなくてね．．．300体近くいるんだ」

アル「それだったらAランクだな」

アルは納得した様に頷く。

レオ「それじゃー行こうか」

アル「ああ」

アル・レオ「……【転移】」

2人が声を揃えて魔法名を唱えると、一瞬にしてその場から姿を消した。

アル「……さてと、ウォーターウルフマンはどこに居る？」

ウォーン、ウォーン……

アルの言葉を遮るように、どこからか犬の遠吠えのようなウォータールフマンの鳴き声がする。

レオ「……どうやらすぐ近くみたいだね」

アル「ああ……向こうもこっちに気がついたみたいだ。近いてくる……！」

その瞬間、アルの周りには微かだが鋭い殺気と濃度の高い魔力が身体から溢れ出していた。

アル「・・・少しは楽しませてくれよ？」

アルは問い掛ける様に呟いた。

そんなアルにはっきりとした殺気を向けながら、1体、また1体とウォーターウルフマンがやってくる。

レオ「やっぱり、結構数いるな・・・」

アル「邪魔すんなよ？」

レオ「しないよ。

まだ死にたくないんで」

気付けば数百体となったウォーターウルフマンの群れの前で、緊張の欠片もないような会話をしている。

アル「そんじゃ〜まあ、さっさと片付けて次に行きますか」

アル「まずはお手並み拝見」

そうは言うものの、アルは戦闘体勢をとっているようには見えず、レオは少し離れた木の上で成り行きを見ている。

《ガルルル》

《グルルル》

《ガルルガッ》

そんなアルとレオの態度にウォーターウルフマン達は怒った様に唸る。

そしてついに1体がアルに向かって得意とする水の中級魔法【アイスボム】を放つ。

するとつられる様に、他のウォーターウルフマンも次から次へとアイスボムを放ってゆく。

アルに放たれたアイスボムは、アルに当たると爆発し、そして同時に凍り付く。

アルに当たり、地面に当たり、アイスボム同士で当たり・・・

たちまち冷気や砂埃で視界は悪くなり、アルの姿は見えなくなる。しかしレオは焦ることもなく、むしろ楽しそうに見ていた。

ウォーターウルフマン達はアルに直撃したことを確認し、死んだと判断したのだろう。

狙いをレオに変え始めた。

しかし・・・

アル「・・・・・・・・がっかりだな・・・・・・・・」

アルの声が響いた。

アル「もう少しまともな攻撃を期待したが・・・・・・・・時間の無駄みたいだ」

アルがそう言った瞬間。

ウォーターウルフマン達が次々と地面に飲み込まれていった。

アル「レオ、行くぞ」

アルはレオにそう言うと、スタスタと歩いて行ってしまった。

レオ「さすがアルだな！」

次の目的地へ歩いて行くアルを追いかけながら、レオは話し掛ける。

レオ「闇の中級魔法【拷縮】（ゴウシユク）を無詠唱であの範囲と威力・・・・・・・・最上級並じゃない？

普通あの魔法って落とし穴みたいに相手の身体を動けなくする魔法だろ？

それを穴に閉じ込めて消滅させるなんてねえ」

アル「・・・・・・・・」

レオ「・・・？
どうかした？」

アル「・・・いや、なんでもない」

アルは一瞬何か言いかけたが、結局その時は何も言わなかった。

そして、その後の3件もアルが最上級並の中級魔法1発で終わらせていき、ついに最後の依頼となった。

ちなみに4件の依頼でかかった時間は、移動や搜索も含めて1時間程度しかかかっていない。

普通のAランク保持者なら、1つの依頼で3〜4時間はかかると言われている。

アル「最後はなんだ？」

レオ「ダイヤモンドパンサーの討伐だよ」

アル「ダイヤモンドパンサー？」

珍しいな・・・」

レオ「だよな・・・」

俺は初めて見るよ。

アルは見たことあるのか？」

アル「かなり前に1度だけある・・・」

レオ「アルでさえ1度なのか？」

レオが驚くのも無理はない。

今でこそ総帝としてSSS、SSランクの任務しか受けませんが、漆黒の魔術師になる前は毎日の様に朝から晩まで暇さえあれば依頼を受けていた。

それでもダイヤモンドパンサーを見ないのは、とても数が少ない稀少種であると同時に、人間に危害を加えることは滅多にないためである。

ちなみに任務と依頼の違いは、依頼はいろいろな街や村などからギルドに対して討伐などをお願いし、その依頼に合ったランク保持者をギルドから“派遣”すること。

任務とはSランク以上の二つ名持ちにだけ要請される国が依頼する極秘任務と、ギルドが自ら“処理”するべき討伐を行うものである。

なので、先ほどのギルド“ウルフベッジ”のような小さなギルドにはSランク以上の任務は置いていない。

アル「この辺りでダイヤモンドパンサーが出るのはおかしくないか？」

レオ「そうだねえ・・・」

ここ数十年では一度もない。目撃すらされてないかな」

アル「・・・・・・・・」

レオの言葉を聞いてアルは考え込む。

ガサッ

不意に近くの茂みが動いた。

アル・レオ「……なっ!?!」

アルもレオも気配があったため、ダイヤモンドパンサーが出てくるのはわかっていた。

ならば何故驚いたか？

それは、茂みから出てきたダイヤモンドパンサーが通常の1.5倍はあるだろう大きさをしていたからだ。

しかし流石は帝。

すぐに落ち着きを取り戻した。

アル「【ギオ・ブラッド・ダークレイ】」

アルが闇の最上級魔法を唱える。
アルの人差し指から放たれた黒いレーザーの様なものが、ダイヤモンドパンサーの心臓を貫いた。

ダイヤモンドパンサーは暫く痙攣していたが、やがて動かなくなっ
てしまった。

アル「……………」

レオ「……………」

依頼は終了したのに、どちらも口を開こうとしない。

アル「……………レオ」

沈黙を破ったのは意外にもアルだった。

レオ「……………何？」

アル「レオ……………いや、雷帝に命じる」

雷帝と言われた瞬間、いつもニコニコしているレオの顔が真剣な表情になった。

レオ「・・・何でしょうか？」

アル「少し気になることが出来た。

次の日曜10時に集まるよう帝全員に伝えてくれ」

レオ「了解しました」

アル「任せた。

・・・【転移】」

アルは用件を言うと帰ってしまった。

残されたレオは、ダイヤモンドパンサーの皮を剥ぎ取るとギルドへと戻って行った。

これは余談だが、Aランクの任務5つを僅か1時間半で全て終わらせてきたレオを見て、受付係は気絶したらしい。

受付係の後ろには、その光景を見て大笑いするギルドマスターも居た。

予感（後書き）

次回は八帝が全員集合！？

ティアラやミラたちの出番はあるのか？

お楽しみに〜。

八帝会議（前書き）

今日もまた寒いです。

でもやっと更新出来ました。。。。

八帝会議

アルが依頼を請けてから数日・・・

帝が集まるように言われていた日曜になった。

聖光の守護者本部の地下5階の八帝専用会議室に7人の男女の姿があつた。

7人はそれぞれ違う色のコートを着てフードを被り、大きな円卓を囲んでいる。

静かな会議室。

ふと、青のコートを着た氷帝らしき女が黄色のコートを着た男に尋ねる。

氷帝「・・・・・・・・ねえ、雷帝？」

雷帝「なんですか？」

氷帝「もう10時になるけど・・・総帝は？」

周りの者達も気になっていたようで、2人の会話を聞いている。

雷帝「・・・・・・・・さあ？」

????「さあ？ってなんだよっ!？」

堪らずと言つ様に緑のコートの男が叫ぶ。
すると紺のコートを着た男が眉を顰めて言う。

「????」・・・煩いぞ、風帝

風帝「わりー、わりー!

でも闇帝も気になるっしょ?」

闇帝「……………まあな」

光帝「それで?」

風帝と闇帝の会話を余所に、白色のコートを着た光帝らしき女が続きを急かす。

「????」雷帝はいつも総帝の側にいるんだよねえ?」

赤のコートの女(炎帝)が尋ねる。

雷帝「いつもはね」

光帝「いつもはって……………今日は違うの?」

雷帝「今日はって言うか……………数日は?」

炎帝「数日間会って無いの!?!」

炎帝が叫び、他の者も驚いた表情をする。

雷帝「ちょっと調べたいことがあるって言って何処か行っちゃった

んだよね〜・・・」

炎帝「ど、どうしようっ!?!」

光帝「ととりあえず、えーっと・・・」

雷帝の話を聞き、炎帝と光帝が取り乱す。

すると今まで黙っていた茶色のコートの男、土帝が口を開いた。

土帝「炎帝も光帝も落ち着け、

あの方は言った事は必ず守る・・・

だからワシらはあの方の下に居るのだろうか?」

そこで1度言葉を切る。

土帝「あの方は雷帝に10時と言ったのだろうか?

ならそれまで気楽に待てばいい」

土帝の話を聞くと、今まで騒いでいたことが嘘の様に全員が落ち着き、会議室は再び静かになった。

カツカツカツカツカツカツ・・・

廊下から規則的な足音が静かな会議室に聞こえてきた。

七帝「」「!!」「」

足音にはぼ同時に気付くと、7人はバラバラに動き始める。
まず炎帝が珈琲を淹れるために席を立つ。

氷帝と光帝は誰も座って居なかった席の両脇に立つ。

風帝と闇帝は扉の前に立つと、取手を握りいつでも扉を開ける様にする。

そして雷帝と土帝は扉の正面に立つ。

カツカツカツカツカ・・・

足音が扉の前で止まる。

すると風帝と闇帝が扉を開く。

それに合わせる様に全員が頭を下げる。

初めに頭を上げたのは雷帝だった。

雷帝「お待ちして居ました、総帝。

・・・どうぞお座り下さい」

雷帝の言葉で氷帝と光帝が椅子を引き、それに合わせて総帝は歩き出す。

総帝が席に就くと、立っていた者も自分の席に座る。

炎帝「どうぞ」

炎帝も珈琲を出すと席に座る。

総帝「・・・」

総帝は無言のまま、出された珈琲を口に運ぶ。

総帝が入室して数分、全員が落ち着いた頃を見計らって今まで閉ざしていた口を開く。

総帝「……………待たせてしまつてすまない」

光帝「わたし達は気にしていません。
ですから総帝も気にしないで下さい」

闇帝「そうです。

自分達は貴方様に使える者、
貴方様の命なら何時間だろうと待つ事は苦ではありません」

他の者も言葉にこそしないが考えは同じようだ。

世界最強と言われる戦闘能力と魔力。

そして、多くの者をまとめる統率能力。

全てにおいて他人を凌駕する聖光の守護者の総帝に皆、時に恐怖の、時に憧れの眼差しを向ける。

それは七帝とて例外で無く、各属性の最高の使い手と言われるからには人の数倍のプライドを持つ彼らも、総帝の圧倒的な力に平伏せ忠誠を誓つたのだ。

総帝「ではさつそく本題に入ろう」

総帝も言い返すだけ無駄と分かっているのだろう、何も言わずに話を進める。

総帝「今日、皆に集まって貰ったのは……………魔物の様子がおか

しいからだ」

風帝「魔物の様子がおかしいツスか？」

光帝「??？」

風帝と光帝はあまり魔物討伐の任務をしないので心当たりが無いようだ。

氷帝「!!！」

闇帝「……………そういえば……………」

逆に氷帝と闇帝は心当たりがあるらしく、詳しく思い出そうとしている。

土帝「……………続きを聞かせて頂きたいのだが……………」

土帝は何か考えがあるのか、先を促す。

総帝「……………雷帝、先日のギルドの依頼の内容を覚えているか？」

雷帝「覚えていますが？」

総帝「1つ目と5つ目の内容は？」

周りの者は頭に？を浮かべながら話を聞いている。

雷帝「1つ目はウォーターウルフマン約300体の討伐、5つ目はダイヤモンドパンサーの討伐で……………」

七帝「「「?!?!?!」」」

全員がこの会話で総帝が何を考えているのか分かったようだ。

風帝「ウォーターウルフマンは群を作っても10体くらいのはズ・

・3桁の群が確認されたのって初めてじゃないっすか？」

炎帝「そうだね・・・

・ダイヤモンドパンサーがこの辺りで出たんですか？」

総帝「・・・・・・・・そうだ」

氷帝「・・・ダイヤモンドパンサーはもっと北の極寒の地に行かないと普通は居ないわ」

闇帝「確かにおかしいですね・・・・・・・・」

総帝「・・・・・・・・この2件だけでは無い。

この数日、様々な場所を調べてみたが・・・魔物の出現率が1・5%上がっている。

更に突然変異や今までに無い行動をする魔物が・・・・・・・・全体の2割だ」

七帝「「「?!?!?!」」」

皆、驚きのあまり声が出ない。
会議室に重い沈黙がながれる。

総帝「これは聖光の守護者創設以来初めての事だ」

総帝が全員の顔を見ながら再び話し始める。

総帝「．．．考えられる理由で1番可能性が高いのは．．．

何者かが魔物を纏め聖光の守護者を潰そうと．．．いや、世界を乗っ取るうとしてるのだろう．．．」

総帝のまるで自分の予想が外れて欲しいと言う様な話し方に誰も答えることが出来ない。

しかし総帝の予想が今までに外れた事はほとんど無い。

そして七帝も感じてしまったのだ。

帝として数々の死線をくぐってきた自分達でさえ恐れる事が起きてしまう．．．と。

会議室に何度目か分からない沈黙がながれる。

まるで時が止まったかの様な錯覚に陥る程、静かで誰1人として動かない。

土帝「．．．．．ワシらは何をしたら良い？」

長い沈黙をやつとこのことで破る。

総帝「．．．まだ俺の予想が正しいのかも、何が中心にあるのかも分からない．．．．．

各自、いつも通りに任務を行なってくれ。

ただし常に気を抜かずに時間がある時で良い、原因を探ってみてくれ」

総帝は複雑そうな顔をしながら話す。

七帝「「「分かりました」「」」

総帝「何かあったらいつでも連絡してくれ。

それから、これからは2週間ごとに会議をする」

七帝「「「はい!」「」」

総帝「では………解散!」

解散という言葉で全員が立ち上がる。

七帝「「「ありがとうございました」「」」

その挨拶と礼を終えると、1人また1人と帰って行く。

挨拶から数分、会議室に残って居るのは総帝と雷帝だけだ。

雷帝「………総帝」

雷帝が躊躇いがちに口を開く。

総帝「……なんだ?」

雷帝「おかえりなさい。

何も無かった様で安心しました」

雷帝が普段とは違う、心の底からと言つに相応しい様な顔で笑う。

しかし総帝は表情を変えない。

総帝「俺がSランクの魔物相手に怪我をするとでも？」

雷帝「そんな事を言えるのは、世界中を捜したって貴方くらいですよ?」

総帝「…………悪かったな」

総帝は眉間に皺を寄せながら扉へ向かう。

雷帝「…………その逆ですよ…………」

雷帝がとても小さな声で呟く。

総帝「何か言ったか？」

雷帝「いいえ、何も…………」

総帝「…………言い忘れていた。

……………タダイマ…………」

総帝のかるうじて聞こえる声に雷帝は驚き立ち止まるが、総帝は恥ずかしいのかさっさと会議室を出て行ってしまった。

雷帝「……………」

しかし雷帝は動かない。

総帝「早く来いっ！」

待ちきれないのか廊下から総帝が呼ぶ。

雷帝「……………何時までも、何処までも貴方について行きますよ……………」

雷帝はそう言うと会議室を後にした。

もちろん総帝は雷帝の言葉を知らない。

八帝会議（後書き）

なんか・・・見づらくなっちゃったかな？？

見づらいという方がいたら教えてください！！

レオ・クラント

次の日。

アルが教室に入ると一斉にクラスが静まり返った。

アル「？」

するとレオがすかさずアルに話しかける。

レオ「忘れちゃったの？」

アル「何がだ？」

本当に忘れていているようで、これにはレオもハアァとため息をついた。

106

レオ「この前ボルト家のロイとかいつのを半殺しにしたでしょ……」

その言葉にアルは「ああ……」と思い出したように言う。

そんな中でもアルに話しかけてくる人たちがいた。

もちろんティアラたちである。

ティアアラは王女という立場から、アルの正体を知っているので何も驚くことはなかったが、リオやミラ、グリードもいつも通りの感じ
でアルと話している。

セレナ「今日の1時限目はグラウンドでやるからな！！
遅れずに集合すること！」

HRが終わり、アルたちは遅れないようにとグラウンドに向かった。

セレナ「全員そろったようだな」

セレナはそう言うが、ロイの姿はなかった。

ロイの傷はアルが完璧に治したので、病欠ということはないのだが
この日ロイは欠席したようだ。

この日もアルたちのクラスは模擬戦を行っていた。

アルは生徒たちが戦っているのを遠くから見ている。

アル（やはり．．．生徒の実力なんてこの程度か．．．）

アルがそんなことを考えていた時．．．

ドッカーン

という派手な音と共に、グラウンドに土埃が舞いグラウンドに居た
全員の視界を奪った。

「「キヤーツ」」

「「なっなんだ!?!」」

アル・レオ「「.....」」

誰もが戸惑う中でアルとレオだけが落ち着いて周りの様子を伺って
いた。

ゆっくりと土埃が晴れていく。

すると先程までは居無かったはずのころうじて男女と判別出来る2
人組が居た。

何故かろうじてなのか。

それは、男は黒の、女は青のフード付きのコートを着ていたからだ。と言っても女の方はコート袖や裾にフリルをふんだんに付けているため、よく見ればすぐに女だと分かる。

「……だ……誰……?」

名も無き生徒の1人が呟く様に問い掛ける。

男「……俺らかあ?」

男がやや語尾が伸びた独特な話し方で答える。
男は指先から小さな黒い球を出しながら話す。

男「俺はあ、総帝だ」

女「私は氷帝なの」

「「ええっ!?!」」

「まじでっ!?!」

「「嘘お〜!?!」」

総帝、氷帝という単語にざわめきが増す。

男「嘘じゃ無い。

俺は、闇属性だし」

「な、なんで・・・ここに?」

その場に居た者は皆気になっていたのだろう。

一瞬にして男の話しを聞く態勢になった。

むろん、セレナもその内の一人だった。

男「何故かあ?

そんなの・・・」

生徒達が息をのむのがわかる。

男「・・・暇だからに決まってるじゃん?」

「暇、だか．．．ら．．．?」

男「そお。

暇だからあ、ちょっとその辺のガキでえ、遊んでやろっかなあってえ」

男はまるで遊びの説明をする様に話す。

そんな男の態度に何人かの生徒が反論しようと、口を開きかけた時グラウンドにある音が広がった。

?????」くすっ」

時は男が暇と口にする少し前まで遡る。

男『俺はあ、総帝え』

女『ウチは氷帝なの』

レオ「……だつてさ。

……どうする?」

男女の言葉を聞き、レオはアルにしか聞こえない様な声量で尋ねる。

アル「……何か情報が得られるかもしれない。

命令だ、行け」

レオの声量に合わせてアルも話す。

レオ「雷帝という事をばらしても?」

アル「構わない」

レオ「了解しました」

レオは数歩前に出ると軽く俯き口角をやや上げる。

レオ「くすっ」

レオはわざと皆に聞こえる様に笑う。

レオ「くすくすくすくす．．．」

帝と名乗る男女を始めとして、アル以外の全ての者が突然笑い出したレオを見る。

男「・・・なんだあ、お前え

何笑ってるんだあ？」

男は怪訝そうな顔をレオに向ける。

レオ「くくつ・・・だってあんたが総帝とか・・・笑うしかないじゃん」

男「なんだとお!？」

レオ「だから、本物の総帝はあんたみたいな雑魚じゃないって言ってるの・・・

分かんない？」

レオは男を馬鹿にしながら話す。

女「なんで私たちが帝じゃないってゆーの?」

男「ちゃんとしたあ理由があるんだろうなあ？」

レオ「当然」

周りの者は自信たっぷりなレオの姿を不安そうに、又は非難する様に見ている。

レオ「あんた達は自分自身で帝じゃない事を証明してる」

男「ああん？」

レオ「1つ聞くけど、あんた達の属性は？」

男「さつきも言っただろ！」

闇だよ闇い！

女「水なの〜」

さも当然と言う様に属性を言う。

レオ「ほらまた自分で自分の嘘を証明した」

レオは2人に聞こえない様に言う。

男「なんか言っただかあ？」

レオ「いや、なにも。」

じゃあそろそろあんた達の正体を教えて貰おうか」

男「正体もなにもお、俺は総帝だってえ言っつて・・・」

レオ「だからもう嘘はいいって」

男の言葉を遮りレオは言う。

それにキレたのは男では無く女だった。

女「さつきから何なの〜!？」

私たちを嘘つき呼ばわりした事、後悔させてやるなのっ!

” 漂いし水達よ、我に盾つくかの者を氷の世界へ引き込みたまえ”

【氷銀世界】

女は早口にレオへ向けて魔法を放つ。

ドーン という音と共にレオは再び土埃に覆われる。

リオ「レオ!!」

強化魔法を使う前に氷銀世界はレオに直撃した。

レオが居た場所には巨大な氷の塊が数え切れない程突き刺さり、レオの姿を確認する事が出来ない。

リオ「ああああ．．．レオ．．．」

いつもは決して人に弱みを見せないリオも、レオが水の上級魔法をくらって無事なはずが無いと判断したのだろう。

涙を流しながらふらつき側に居た生徒に支えられる。

女「んふふふふふふ〜
ウチらに盾つくぼーやが悪いの〜」

女がまるで語尾に音符が付きそうな程明るい声で話す。

グリード「よくもっ〜！」

リオは泣きながら女に攻撃しようとしている。

男「!!！」

しかし何かに気付いたらしい男が口を開いた事により、リオが攻撃する事は無かった。

男「おいしい！」

なんか氷の様子がおかしいぞお!!！」

男の言葉に促されてそちらに目を向けると、氷の中央から白い湯気のようなものが立っている。

次第に湯気は増え、シューウという氷の溶ける音も聞こえ始めた。

そして・・・

レオ「あんた達が帝じゃないって分かったのは、まずコートが違うからだ」

湯気が立つ場所からレオの声がした。

男女「なっ!?!」

レオ「レオ!!
無事なのっ?」

レオ「みんな心配掛けてごめんね。

でも俺は負けないから安心して?」

レオはリオやほかの生徒を安心させる様に微笑むと、視線を男女に戻す。

レオ・クラントツ（後書き）

更新が遅くなってしまいました・・・。
次は出来るだけ早く更新したいです（<>）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9249y/>

Non...daily life

2011年12月7日05時51分発行